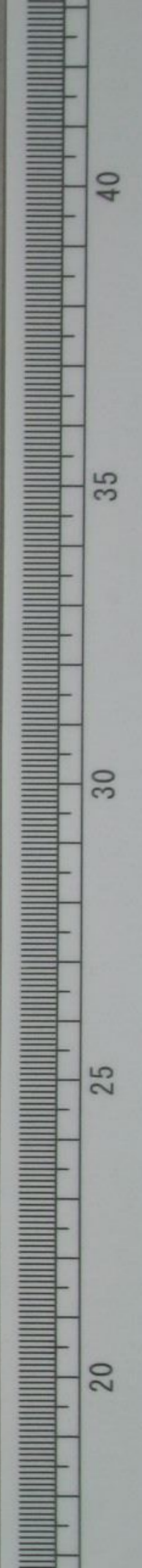




千 4
1077
6 止



多士
1077
6止

繪本審鑑卷第六目錄

百六十六

達磨辨玉
たつま ぶんべんぎよ

百六十八

一指をす
いちのさゆ

百六十九

一花をす
いちけのばらま

百七十

一葦をす
いちいのみぐさ

百七十一

面壁をす
めんへきのふらぬ

百七十二

徳山入門棒
とくさんにゅうもんぼう

百七十八

烏臼搥
うすうす

百七十七

武帝達磨
ぶてい たつま

百七十九

隻履をす
せきり のぐさ

百八十

沙衣をす
さゐのぐさ

百八十一

板齒をす
いたぢ

百八十五

結瓦大蕪菊
むすか瓦 だいぶぎく

百八十七

深の二上座
ふか のにじやうざ

百八十九

涇山末跨搥
けいざん せつあし

繪本審鑑卷第六目錄

百七十四

南泉一虎同答

百七十五

文殊無着同答

百七十三

偽山仰山拈茶同答

百七十六

藥山拈者

百七十二

佛子贊茶

百七十七

新德滅燭

百七十一

首山竹篋

百七十八

曹山同答

百七十

盤山拈肉大快

百七十九

有甚磨磚

百六十九

南泉一多和

百八十

迦葉作舞

百六十八

作山劃一劃

百八十一

作山半月結

百六十七

作山劃一劃

百八十二

資福一圓相

百八十六

南詢名必錄

百八十七

展布名必錄

百八十五

黃蘗虎考

百八十八

麻名抄

百八十四

百丈野航

百八十九

黃蘗大後後

百八十三

伯山移木橋

百九十二

布袋

百八十二

河圖世王

百九十五

悟達國師

新才卷六 卅金

書于安由子越之繪本審鑑之後
目錄之端

龍跳取明水 湔瑕審鑑清

傳神千歲後 光耀昭群生

岫雲軒主林元叟題



百五十六 達磨辨玉

達磨六
番反玉

乃中三

此亦子也

われ

大王希

有の玉

とて

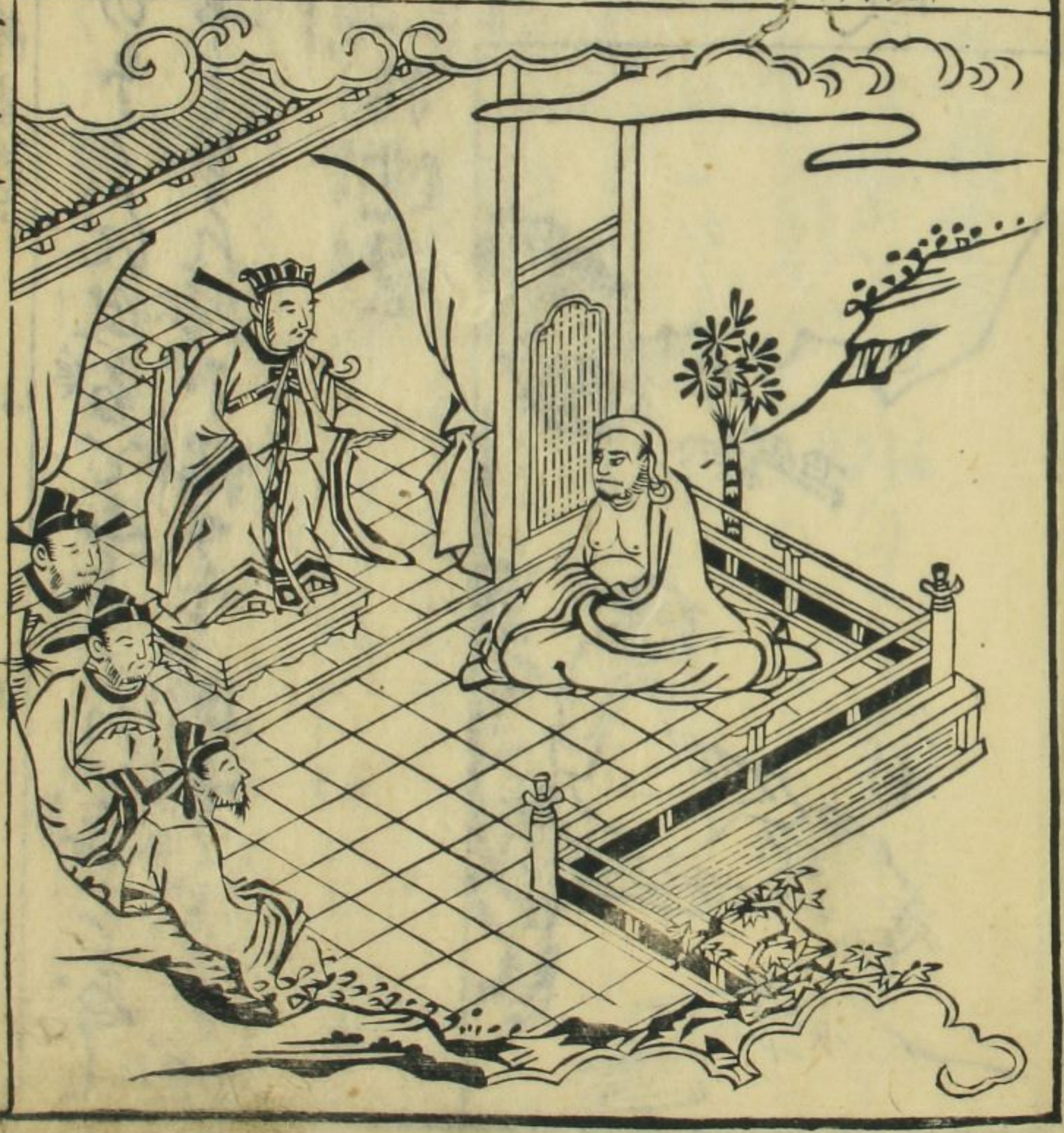
とた

にんせ



らせりるに才三の皇子ハバままとの寶に何ん
 家ハ何法あしぐハ家とわのどと何んか
 かりその先に寂若多解そか近臣何んか
 しが皆はしとばと感一なるとあり。能あるも解ハ
 大主乃此方依かりし
 百五十七 武帝を唐
 梁の武帝因小和祖達磨大伴西天より海
 後び事りて金陵とよふ所よりとて帝子母名
 帝の如くはそ聖帝中一義作の云廓然至聖
 帝ハ云朕子對しるもの作作の云不滅帝
 契りば作遊よ盧と折くはと波と魏と

ほう小帝
 奉志志
 云小回
 の云陛下
 人を織わ
 帝の云云
 らび徳の
 云これハ
 観る大士
 何心何と



三年花散
この中より
竊去れり。
好ふまゝこそ
所在と
失ひ



百字 一華達磨

花開玉葉

放庭雪 人腰

百字 御衣を磨

赤縁橋 ち系根

東土の天示

納僧様



百字二 一葦達磨

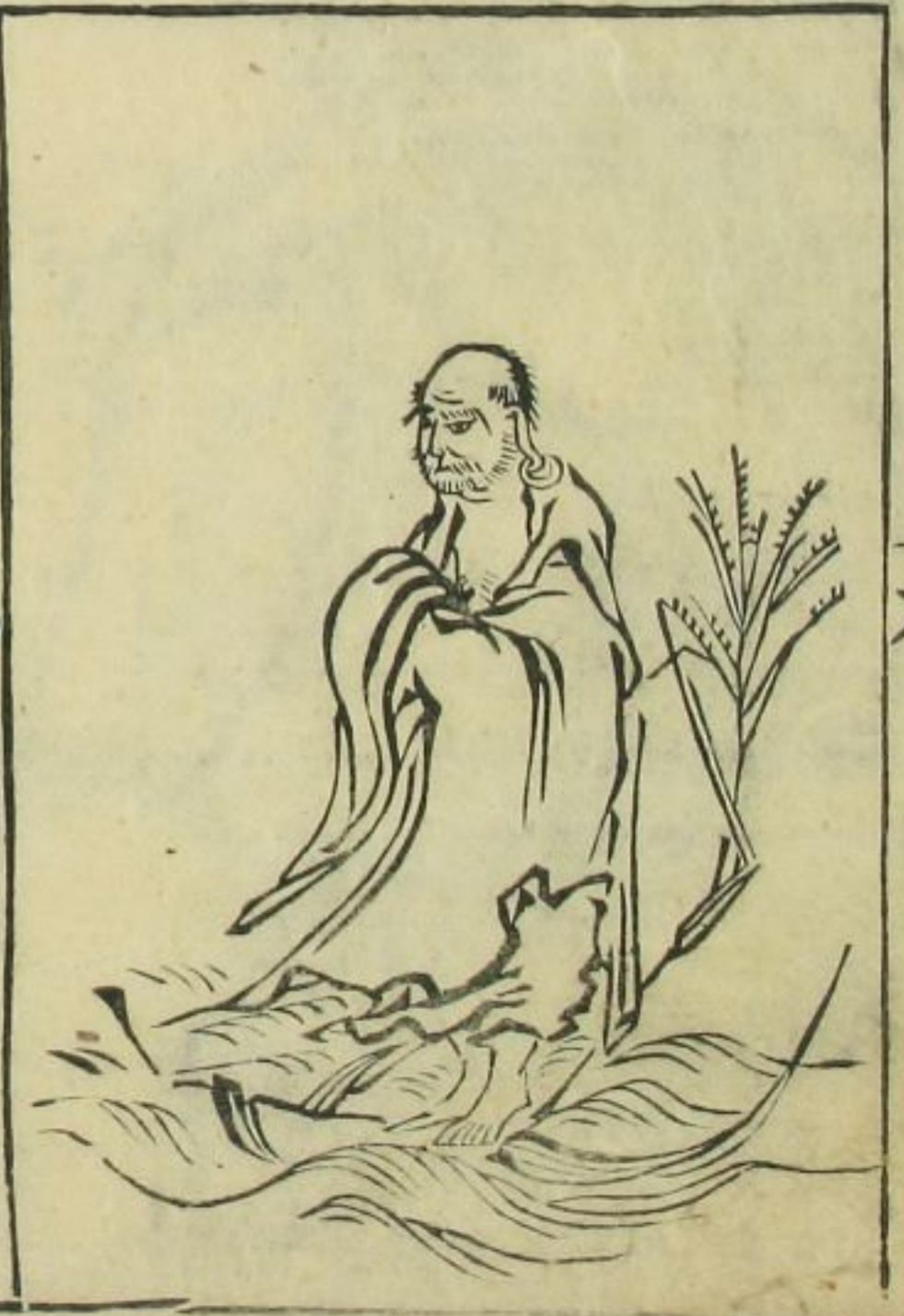
廓然無聖

逆龍鱗一葦

横江

百字三 板齒達磨

希叟達磨忌拈香
不紹金輪尊貴位
被人打落
富門齒



百字四 面壁達磨

達磨嵩山の少林を小於く。西壁に坐して九年。人
これと聞くとあり。時
りこれと壁觀婆
羅門と云ふ傳灯分三
少云。作梁より魏
涉了。洛陽少林を
面壁して九年。九
年と經く二祀小
達磨初め六二説教



乘とゆゑ行ど好草小心印とゆゑ執とゆゑ
宗と欲と所理教外別傳不立文字直指人心見
性成佛也

百六十五 鎮列大蘿葡萄

傍向趙列
兼聞和為
親南泉子見
と是否列曰
鎮列大蘿
葡萄頭とあす
とさ



百六十六 徳山入門棒

徳山の堅程
作初置小
とく全剛
經と講どか
乃全剛と号
と好ある方
乃程宗と
由車小疏



百三十八 烏白棒

烏田孫作 小傍向を
詠甚やま云定列作
の云定列のは乃這
表と何れ云別あ
比作の云ああ
どんバ文子の中
持されとらく役
お傍れ云持れ
眼わり。まのこ
人とおことあつこ



作乃云今り一ヶと打とととらく又打とと下と
偽役あつら。作の云届持え主人の喫はらりこと
あつらり。云物柄和あのも表おはらりことといんか
せん作の云此ああをた山僧あう回とせん傍
をあまき作の云中の持と奪とく師と打と
三下作の云届持と偽の云人の喫はらりこと何
あり。作の云あつこふヶの漢と打とと偽礼ねん
作の云却とと度小吉や偽大貧とくお作の云
清め度清め度
百三十九 徳山末跨棒
徳山小巻衣よ示とく云今取善法とん活と

者八十捧時尔偽
 わりあぐ礼とあり
 作便打信云某甲
 佐也回と云るる
 便打作の云るを
 ひこれぞれ乃きの
 人そ云新羅人作
 の云いまご船船り
 跨ざるとり三棒
 とありふりしと



百千 南泉一虎同答
 杉山の賢禪師ゆ家南
 泉け三人お侍と道年
 虎りりけり。ほふ南泉
 ゆふり向先の虎ハ何に
 ゆふりぞゆふの云徹見よ
 ゆふり。ゆふ又賢禪師よ
 とも物よゆふりとゆふ
 又南泉よ回泉の云大
 鬼にゆふりと



受戒とらやいらや。吾等の曰受戒とく久し。吾の曰
 有執心あらんむ。おんぞ受戒と用いん。吾等辭去
 退く。吾童子におまうし。吾等吾等に曰前を
 修う。吾多少を言と大徳とふ。吾等無徳と
 童の曰。吾多少を。吾等境回く曰。けとばらるの
 吾とららる。童の曰。けと合割。衆の衆ありありを
 吾悽然悦彼。吾ハ即又殊あり。再びるく。此
 即童子と經を有く。此ハ乞。一言別とる。と
 童偈と信く曰。面とよ真あり。此衆の具と表
 り。真あり妙香と吐。心裏り。真あり。是珍寶
 吾垢と深。吾志。帝と。言乞く。均控も。ちと。俱不

受戒とらやいらや。吾等の曰受戒とく久し。吾の曰
 有執心あらんむ。おんぞ受戒と用いん。吾等辭去
 退く。吾童子におまうし。吾等吾等に曰前を
 修う。吾多少を言と大徳とふ。吾等無徳と
 童の曰。吾多少を。吾等境回く曰。けとばらるの
 吾とららる。童の曰。けと合割。衆の衆ありありを
 吾悽然悦彼。吾ハ即又殊あり。再びるく。此
 即童子と經を有く。此ハ乞。一言別とる。と
 童偈と信く曰。面とよ真あり。此衆の具と表
 り。真あり妙香と吐。心裏り。真あり。是珍寶
 吾垢と深。吾志。帝と。言乞く。均控も。ちと。俱不



東より来りて後て見ると時より陰列喜花寺凡修
 修政等ありてより尚山石震吼乃をりとすを看
 固く湯とみ巻山よりとめぬ

百七十二 偽山仰山摘茶問答

偽山仰山と茶とついで次は曰終日只子が知とすて
 子ガ死とんば仰はよ茶樹と撼らん偽の曰子と
 之用とゆくと仰は曰和尙いん偽は久
 らく産を仰の曰とて所とゆくと其用とゆくと
 偽の云子より二千枚と教と仰の曰和尙の茶葉甲
 喫と茶葉甲枚紙と志とて喫とせん偽の云子より
 二千枚と教とて志とて是の云且た色も平字あり



百七十三 薬山拈者

茶山の偽孫作一日道名を言者言め深と梅山

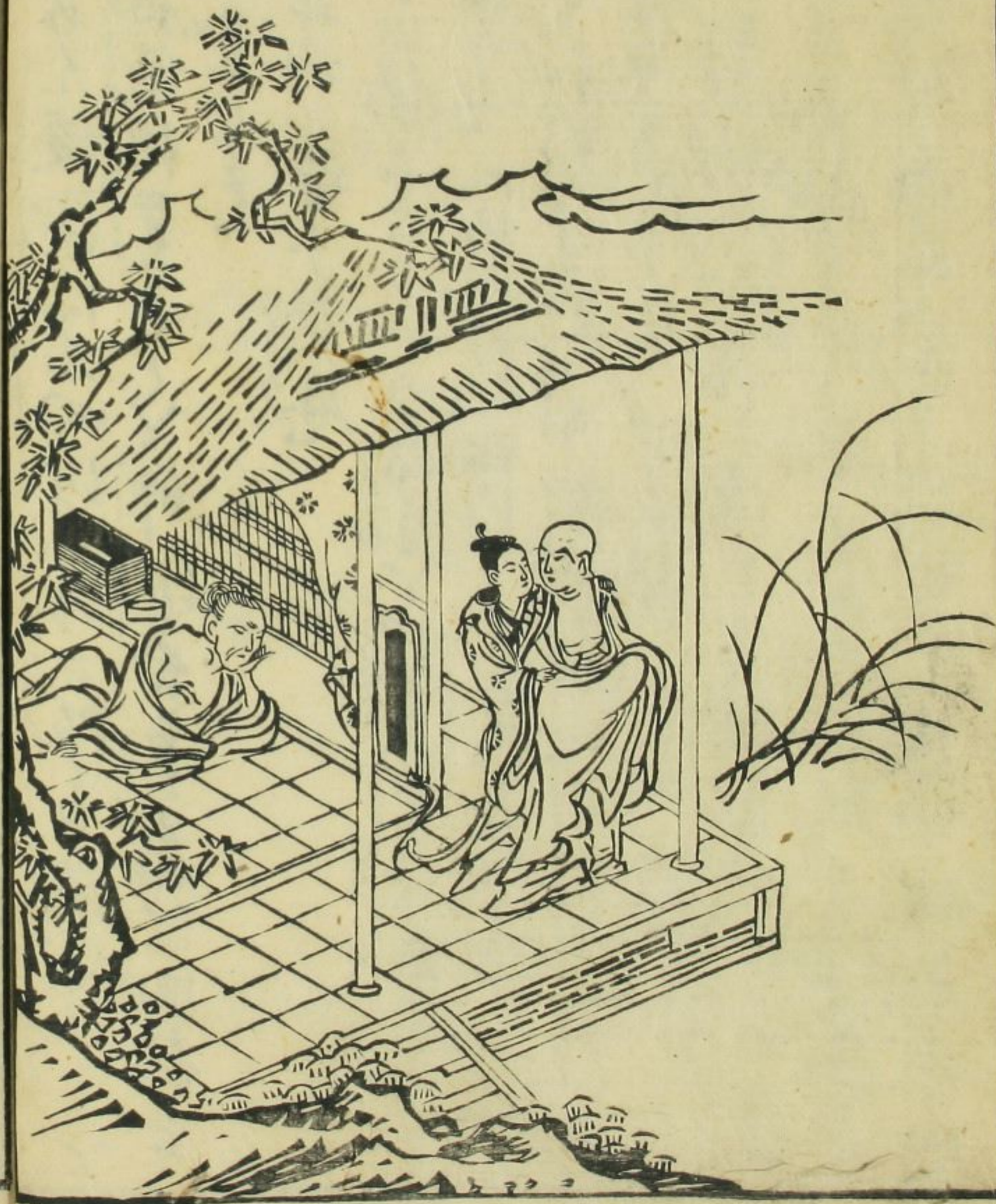
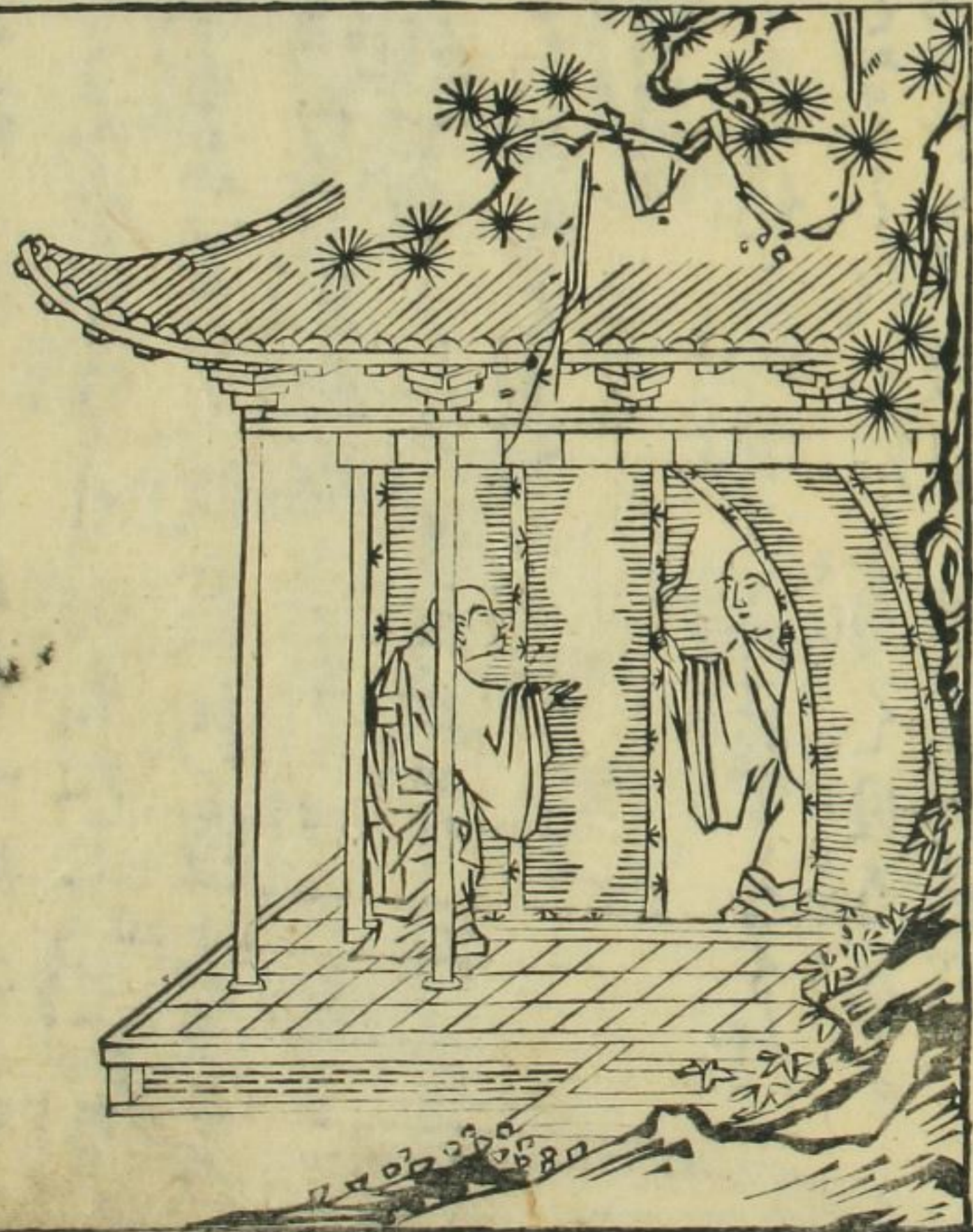
有りぬ梅丸樹の一
 枝ハ葉ハ一枚ハ枝ハ
 ひとつハ作乃曰
 葉有是枝有是
 吾の云枝有是作
 の云約然して一切
 如く枝有是作
 作又云葉有是
 義云葉有是作
 の云約然して一切
 如く枝有是作



去志所ん境沙海小回。沙海の云枝有是地枝と
 葉有是地葉ととと作道有是葉と回體と
 云ふ是と云ふ
 百七十四 安子焚庵
 びり安子あり。一の庵と作葉と。十年と経る。
 作稀り二八の女子花のどくありと。とらびと飯と
 ともく経つと。一月安子かの女子小と。とら
 たりと。とらつて。正當徳の何といひ。
 庵の目枝本定農小傍云冬暖句ありと。女子
 て安子奉似と。安の目我二十年紙ケレ借僕と
 伏書。つら。と。遂は遣おく。庵と焼失ふと也

百七十五 龍潭滅燭
 德山圓了。新澤
 崇信禪師。了
 造。而叶了
 醉しきんとす。
 新澤之れとす。
 一夕。もふよかて
 然るを。新澤向
 何ぞ。飯来けり。
 徳山對て。曰。黒
 新澤乃。燭と。

龍潭滅燭



百七十八
 盤山 膏てき
 蜂子 於て以
 一客人 乃 粘肉
 と 罟と 乃 乃
 居 乃 子 乃
 日 粘 乃 一 乃
 と 割 乃 乃 乃
 家 乃 と 乃 下
 志 乃 乃 乃
 云 乃 乃 乃



盤山 伯肉大悟



維木卷六

十七

乞食を乞ふ。作を下にあらはしむ。



百七十九 南岳磨磚
 南岳懷禪師も昔は病あり時多し禪修もたむに
 房と目小唯坐禪人因ふ性々回く曰はよ坐す何
 とありと。禪の白坐禪人何れ圖をうそ曰佛と地
 とくく。懷禪師一日磚一斤とぬく。房の前を
 磨。禪の曰はと磨して何る。懷禪師の曰。後と地
 と要と。禪の曰磚と磨して豈徒とぬく。とぬん
 禪の曰坐禪して豈成坐とぬんや。禪の曰如何即
 是。禪の曰人乃車を駕がごとく。車を引ずらんて車
 と并が即是牛と亦が即是。禪を引ずらんて車
 不悟。是心と即しは。佛西禪の織子馬駒蹄

天下の人と殺さとりしれ次は符者家に西了関



百年

南泉黄檗

黄檗の運
佛印因り
夢傳乃次
有泉の云
如許の大男
杖ヶ坊思
大笠と戴
仲の云云子
大千世界
總不表許



百半二 南泉一秀相

南泉麻谷と
 同姓と。忠國
 師に遇て中
 師と相と。此
 上子於て一圓
 相と畫と云
 道均ハ即去ん
 宗因相中り
 移る坐を。答



使女人相とあり。師の云と磨あくと。則と云。宗
 云。是甚磨の心行を。師の相喚と。回と云。圓
 師を礼と云
 百半三 仰山守月話
 仰山寂像師。一月梵像あり。其は師地より
 移る。半月の相と畫。像をあらと。海と云。鳥
 と云。

脚と云。掃部と
 師あり。磨と
 像拂袖と云
 使出

長傍礼拜とく之騰とく去



百二十五 資福一彦相

資福は資福
作圓小彦操
尚書東伴
一彦相と書臨
弟子と磨み外
子乞役と云
むね文不
ねと書と云
作中に於
一彦と云陳云



竹徑毛南番乃船主と師役方丈子海之門と軍新と

百八十六 南陽忠國師

忠臣師 因は傍あつと 師は小師 一言おの中に日の字

と畫せしり。傍まうとあ

百八十七 龐居士仰覆回春

仰山居士ありと 拈子と立 師は居士 露將小拈とまは

百八十八 黃蘗云虎却

黃蘗大雄山あり。菌子と播 師は百丈問と曰大雄と

んらや。そ耐黄蘗方のとらと 虎乃ととま。虎の却

とせしれしり。百丈拈ととく切勢と



典を 又 作す 生ん 方と 門を と 三下 司馬 向日



乃法は修く送き師維也と云く白紙を心なき若
 食後又亡傷と云くんと云くち名製後と云く一花
 其し涅槃堂又商人の何の史を切れと云く
 食後又師を修くして山好岩下にある杖と云く一の
 死より野狐と挑むと乃法は修く火葬と師維也
 其上雲前の因縁と奉養樂使の古人清一持法と
 祇對と云く又百生の野狐身は海と修く清と云く
 乃法は修くふるふるべき師の目を修く一掌師と修く
 昔樂を修くと云く師と修く一掌師と修くと修く
 日向涅槃堂赤と文赤修取あつと修く時より清山舎
 ありと云く典を司馬改泥野狐の法を奉て

新本若

廿六

山をめぐりて木影を放下と



百の字三

布袋

此の布袋は、まづ姓氏を詳しむべし。凡そ
腰腹より通脚用多し。性直に或人回らざる
ありとありあり。若くは云々の人、其のまじり
身なり。若くは云々の人、其のまじり。或は布袋
と解む。百の字は、或は拈却と云ふ。亦ある云
云々のこと。兜率内院。或は袋におわく。果して
探りて、傷み所を、傍接とんと擬と、作すれり
よと結と云ふ。此は遠くの人より、或は傷み所
を、或は云々のこと。若くは背と拈と、一下と、傍着と
回せば、それなり。我より一文、彼より一文、ありと云ふ。

布袋より傍へ終日懸腫正ありひの起る市井のり
 よゆへ小児穽志くこれと逐ありひの杖杖とひく
 こりふれありひの教珠とひく児とをふたりあり
 傍ありていりありり是程神を身志と四心教り
 布袋と膝下志く又ふあて立傍云共これ列は
 更子ありありり乃布袋と抱て肩より負て去と
 うこひ今給ふらひ起れ布袋はこれありと又唐
 の末傍契此形腰授けしはひの布囊と肩ふ
 布袋和ると号とと又宋のり明と傍に
 しくり壯大あり世り布袋と稱ひ又元の季業
 論の法氏が男容負つるありん懸膠擁控人球

凡そ熾笑これ今園より平乃布袋に似たりと
 け内より又前より子等の志布袋ありりや
 氏と詳とんとあれんれぬぬべし是もはは
 惟ふ昔仏を世ふ天竺の南にありり
 袋布おとりりは方八百里又百年とんこれ園
 窄狭ありりりは方やうな子里とせはは時その
 亦乃帝位とわのれとりりは世ふありり
 と火身とととりりありり東小西小
 玉あり東と月皮園といひおと水骨おといひ西
 と金完おといひ方ありと銀付と兵と都とて袋
 布おとせじ袋布おといひ八百里ありりとふ百年と

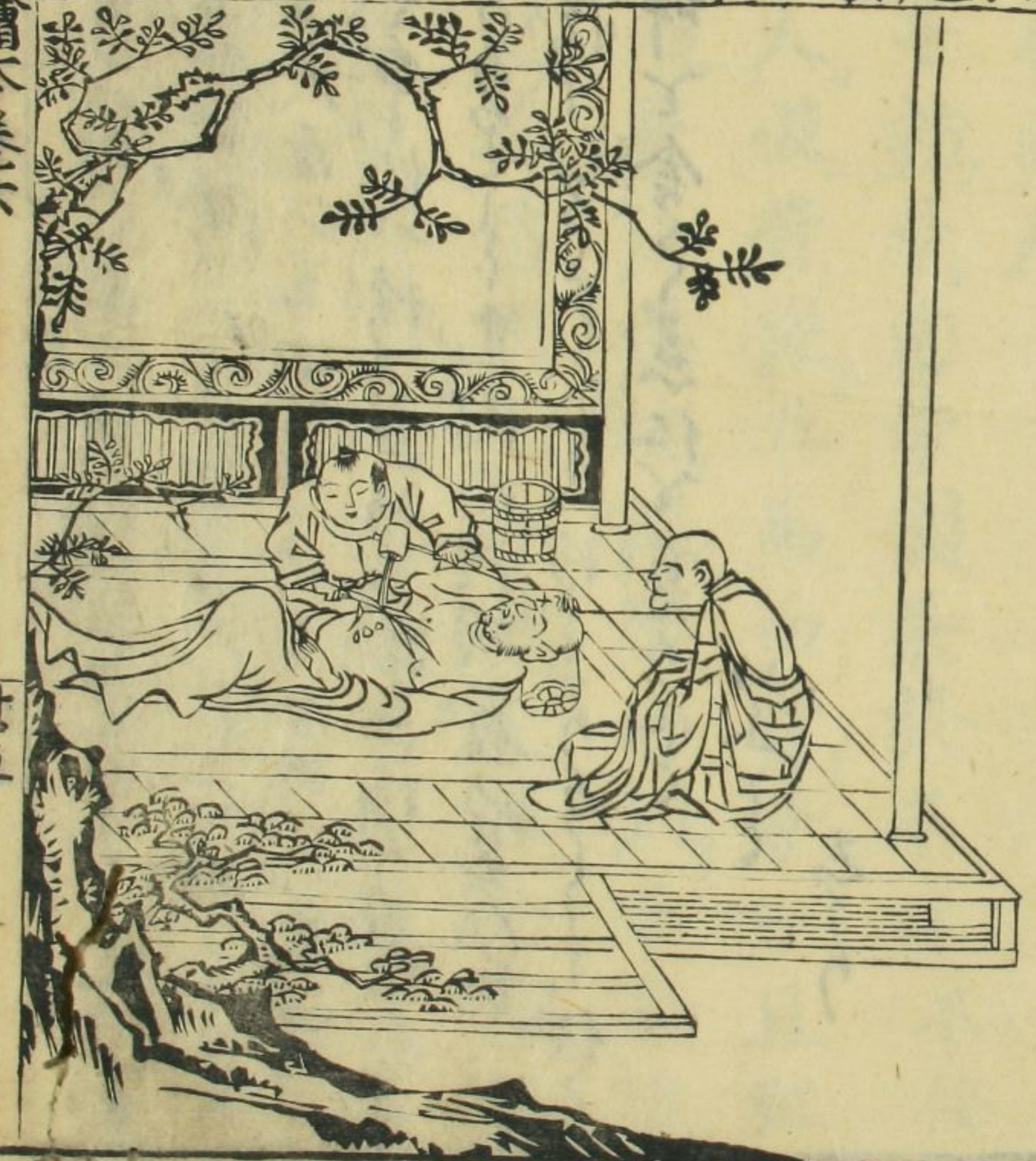
百五十五 悟達因作

昔悦蓮和尚小象傍一見百人ありと其由に一人あり
 瘡を生じと象傍をとりて其ひれあり内對面をう
 たりしむつひあひたり。和尚はたうく今も一人と看明日
 一人う看らねあひありと其由に延考堂のわれ
 正とりしむつ夕朝の飯をわけて其下にかへし
 与流あつと百昇目ごりあり。日と延考堂念ふ。古實
 ゆきし。和尚はうけられし其想と謝り。さて又和尚難
 小あつとつらん。さてつらばあ七日通磨く二時ふり
 山の願うねらふつらん。其後つらつひれをゆりぬ
 となほ悦蓮を内あつと。因作と号するはあつと。其

因作うけつらんとよ人面瘡とよ瘡をうり。は瘡のわら
 人の瘡れごとく。目もけり。はもけり。湯すれどもあつと。ひ
 れをばをれら飯とよぶ。そをて天地よひき。隣に臥す
 きさり。象傍をみれ。他のよ走つと。侍も喝念もあつと。
 醫師よと半ひ。そより因作初夜の時もあつと。り
 うばつと。あつと。瘡のわらとよ。あつと。あつと。杖も介
 らせ。瘡山の敷う。遠をばはん。のど。二本れ。杖も
 振。瘡もまは。瘡をうり。て一。あつと。杖も。あつと。ひ
 う。あつと。に。急。全。敷。梯。因。眼。界。あつと。あつと。あつと。
 処。あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。
 因作とゆれ。侍れ。あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。あつと。

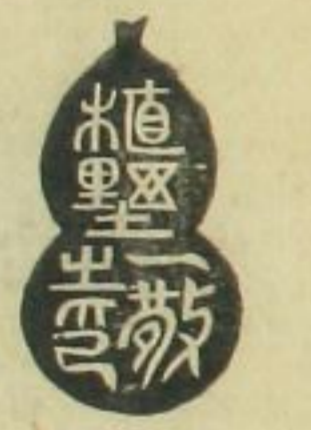
ともし入く密に治すありしうば因作席の所はひ
 ぬ次乃月見をとお作のませりく温泉よりうら柳
 の枝とらるとく瘡を洗其時人西瘡をせし
 曰待我とあらふとあられ宿因ありお終に
 其時言量の記号現るるに
 人西瘡自言我はこれ兆素と仰し其のゆはこれ兆
 妖あり兆妖兆素と稱しその讎と執さんと欲とゆ
 まらぐ七世はまごもゆより前ハ佛法さうん行と
 讎とあらふとあらふとらるる今けは
 豊公乃さうりありよき深ありおくおひ瘡とあり
 讎としくんとんあうらう今ゆ病傷とあらふと

育し大意
 大想と感し
 今則ち云
 すとらら
 て瘡ハ忽
 消ゆると
 必即ハま
 傷見事と
 礼し治すハ
 傷毛見を
 色消去ぬ



今而由子芟補於其闕文重字乃遂窮其原且其辭女字而雖了角童蒙無嘯嘯之累義理亦自歷々予始讀一項無味再讀二項覺薄味遂讀三項至于滋味直得其蔗之佳境也厥盡也者出于雲舟之嫡流筆法誠活然非世之筆耕鴉点之碎焉蓋以口弄手翫之一法示師聖吏賢之一階繪本寶鑑勒為之

名實在此豈與謳歌流言之冊齊架耶惟夫令人得不俟一步而窺青燈樓之切慈々在裏許於乎子之用意也於世亦奚其幸矣也哉戊辰正月上浣隱市植村氏一敬子謹跋昔貞享五年也



鵲

東武

平埜屋

清三郎

書林

中華

小佐治

半危衛門

龜

攝陽

貫器堂

重之梓行

